# 水の天女

伊藤桂一

東方社版

# 水の天女

（乱丁・落丁の場合はお取替え致します）

昭和三十八年十一月十五日発行

定価三二〇円

著作者　伊藤桂一

発行者　石渡磨須子

整版者　内田柳次郎

発行所　東方社

東京都文京区高田豊川町六〇

振替東京五七七七四番

電話大塚（983）一八七三番
七〇三六番

（印刷・邦文堂印刷所）

© 1963 Tohosya Printed in Japan

# 水の天女

伊藤桂一

# 目次

藤娘 5
山女魚剣法 33
押絵の女 59
虫籠 83
月が知ってる 107

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

海底の天女 131
草の褥 155
椿の咲くころ 187
亡霊剣法 215
水の天女 239

裴
幀

御

正

伸

藤

娘

## 1

勝場の部落を出ると、間もなく神流川にかかる。ふだんは徒歩渡りする河だが、上流に出水があつたため渡し舟が出て、舟はいま、河幅いつぱいを流れる、黄濁した水の上を進んでいた。

そろそろ暮れかかる春のはじめ。舟の舳先に陣取つている若い旅侍が、のんびりした節回しで何やら唄つている。だいぶご機嫌のようで、ちようど一区切り終わつたとき、棹をあやつりながら船頭が声をかけた。

「旦那ア、侍にしとくにや惜しい声だ。江戸の色町で新内を流したつておまんまが食えるね。どこまでお帰りになんなさる?」

船頭は、とつくに六十を越えているし、朴訥で言葉に遠慮がない。振り返つた旅侍も、これも山国で育つた顔つきだ。素朴で一徹そうないい男ぶりだが、どこかに子供つぽさのみえるのは、性質に無邪気なところがあるのだろう。ふつう侍は舟の上で唄つたりなどしないものだ。

舟にはかれらのほかに、行商の男が二人、それに土地の農夫と、農夫の連れている牛が一頭、胴の間をもつさりと占領している。おかげで客はみんな、それぞれ隅つこに散つていた。

「旅へ出ると、のびのびとするんだよ、おじさん。国にいたんじや、軽輩だし、誰にも頭があがらん

のだからな」
「その代わり、旦那みたいな人は女にもてる。牝鶏に追つかけ回されて、逃げ場に困つてる雄鶏みてえなんじやないかね。ひよつとするといまの唄も、しよつちゆう聴き手が側にいたのかもしれねえ」
「からかつちやいけない。誰がおれのような低い身分のものを相手にするものか」
「だが、旦那アどうみても、なんかいいことがあつたつて顔つきをしていなさる」
「そりやア、道中、ただ歩いてるだけでも楽しかつたものな。——ところで、おじさん。きようあたりこの渡しへ、二十前後の、人目につくいい女が乗らなかつたろうか」
「ほらきた。実はそうくると思つてた」
「いや、そんな特別の関係じやないんだ」
かれは、当惑したふうに苦笑した。それを話し出したとき、いくらか上気していた。船頭も、案外まじめな顔で受けている。
「冗談はさておき、そのお女中は、どんなみなりをしていましたろう」
「みなりか。みなりは、よくは分からぬが紫つぽい着物を着て……」
「それで、帯は？　髪かたちは？　背恰好は？」
「帯は、ええと帯は、髪かたちは……。背恰好は、そうだ、スラリとして品がよい。それに細おもて

で眼が大きく澄んでいる。全体に明るいかんじだな」
「わかつたようで、わかんねえね。且那にやかなわない」
船頭は、それきり黙つて竿を動かしている。あきらめたのかと思うと、そうでもなく、ふつと思いついたふうに心当たりを語つてくれた。
きようの午過ぎ、渡しで送つた客のなかに、それらしい女がいた。若草に藍の縞縮緬の小袖に黒繻子の帯がよく似合い、紅裏の菅笠をかぶつていたが、表情は何となく沈んでみえた。ひとり旅のようで道中不案内らしく、それで新町の埼玉屋という宿を教えてやつたからそこにいるだろう。温井川がひどい氾濫で、橋も流れ渡しも両三日は出まいから、客は新町に釘づけになる筈だ。埼玉屋の主人は自分と知り合いだから、そういえば女をさがしてくれよう。しかしみたところどうもその女は若妻らしかつた。
「で、且那のおつしやるのは、生娘かね、人妻かね」
「さア、それもよくはわからない」
「なんと、年寄りをからかつたんじやねえでしようね」
船頭が、呆れた顔をしたときに、舟はズズつと砂地をすべつて、岸に着いた。舟代は十文、旅侍はまつさきに降り立つと、



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「ありがとう。そのひとのような気がする」

と、いい残すと、船頭に笑つて手を振り、急ぎ足で去つていつた。

2

埼玉屋というのは、宿場町の中程にあつて、このあたりの旅籠としては、造りもなかなかしつかりしていた。店先で、女のことをたずねるのも何やら気恥ずかしいので、海藤郁之助はともかく泊まりを頼んだ。倖い部屋は空いていた。出水のお陰で宿も繁昌の様子にみえたが、こういうことはたまにはあるらしく、その時は寺や民家も宿をすることになつていて旅の人に迷惑はかけない、と、応待に出た女中が郁之助に語つてくれたことである。

西向きの小部屋に案内された。先ず一風呂浴びることになるが、宿の着物に着更えるとき、郁之助はふところの奥から取り出した平たい紙包みを、よほど大切なものだろうか、どこへ仕舞おうかと大分思案の態だつた。結局、旅袴に無雑作にくるんで、床の間の隅に置いた。

一風呂浴びて帰つてくると、さつそく旅袴をあらためてみた。それほど大事なものなら帳場に預ければよさそうなものだが、そうまでしたくないらしい。どつちみち軽輩の郁之助の持ち物では、大したものであろう筈もないのだが。

夕食になると、忙しいながらも、相手が武家だからだろうか、三十を越えた大年増が給仕に来た。
「なにぶん急なたてこみで、近所から手伝いを頼んだりしております。おかげでこんな、とんだ化物が罷り出まして」
女中は「申し訳ございませんね」といいながら飯をつけてくれる。彼は酒は飲まない。女中は、自分で化物だなどといいながら、結構宿場好みに色つぽく脂が乗つていて、もしかすると郁之助に眼をつけて、自分から応待を買つて出たのかもしれない。が、それにしてはこの旅侍は全く無粋なもので、ろくに女の顔など見ようとせず、もつぱらせつせと食うばかりだ。
「旦那さまは、よほどご空腹のようですね」
「うん。ずいぶん歩いたものな」
「お腹が空いてると、ほかのことはなんにも考えられないつて方がいます。旦那さまも、そのようですね」
「そんなわけじやないんだが、実は、目的があつてこの宿へ泊まつたんだ」
「ま。お武家さまが、こんな安宿へ何の」
「うん、実は」
郁之助は箸をとめ、ちよつと考えて、つづけた。

「この宿に、二十前後の武家の女が泊まっている筈なんだ」
「いられます、おひとり。そりゃアごきれいな方ですよ。めったには見られませんあんな方は。そうですか。あの方が旦那さまのお知り合いですか」
「え？」
「あら、これはどうも、お知り合いだなどと。――もっと意味の深い間柄なのでございましょう？」
「いや、なにも、そんな特別の関係じゃないんだ」
郁之助は、当惑したように苦笑した。そのときも、うつすらと上気している。女中はそれを面白がって眺めていたが、かれらがどういう関係なのかは、まるで見当はつかなかったらしい。
「それでは、お取り次ぎをいたしましょうか」
「そうだな」
「とにかくお食事をなさいませ。そうすれば、落ちついて、いいお考えもうかびます」
「うん。そうだ。そうしよう」
それで、食事を終え、後かたづけがすむと、あらためて女中がやってきた。そのあいだに郁之助は気持を整えたらしく、さっそく女中に頼んでいる。
「さきほど渡しの船頭が、ここのご主人に頼めといってくれたんだが、女のあんたの方が気楽でいい。

その女の人のところへ行つて、道中で、なにか大事なものを、落としはしなかつたか、きいてほしいんだ」
「大事なものといいますと、何か——」
「それはいえない。ただ、そういつてくれればいい。それで、何も落とさないといつたら、人違いなんだから、そのまま帰つてくれればいいんだ」
「もし、落としたとおつしやつたら？」
「私が拾つていると伝えてほしい。こちらから出向いてもいいし、来ていただいてもいい」
「宝物かな？　それとも秘密の絵図面かしら」
「そんな、草双紙に出てくるようなもんじやないさ」
「いずれにしても、お楽しみなことには違いないでしよう。では、旦那さま」
齢をとつているだけに、万事呑み込んで気がきいている。どういい伝えたものか、待つほどもなく、部屋の外で足音がした。
「よろしゆうございますか」
足音も気配も明らかに二人で、女中の声と同時に、郁之助は思わず身が固くなつた。返事をしたつもりだが、声がかすれていたためか、重ねて念を押された。

襖が開くと、女中にともなわれて、ひどくみずみずしい女が入つてきた。年は二十を越えているようだ。女は郁之助を見ず、物腰よく座ると、驚くほど丁重にお辞儀した。

「お初にお目にかかります。落とし物のことで伺わせていただきました。私は岩村田藩蔵役戸田政人の妻志乃と申します」

それから涼しい眼をあげ、物怖じをせず、まつすぐに郁之助をみた。なにしろ好奇の眼をした女中が付き添つているので、郁之助は内心の動揺をかくすのに骨が折れた。道中自分のたずねる相手が、美女でない訳がないと予想してきた。しかしそれがみごとに眼の前に現実としてさし対われてみると、いろいろと動揺することが多かつたのである。はじめは挨拶の受け答えも相当しどろもどろの態だつたが、それでも頭の奥を（そうか。やつぱり人の妻だつたか）という思いがかすめて過ぎた。それが郁之助を、いくらか落ち着かせてくれた。

「私は沼田藩御使い番の軽輩、海藤郁之助です」

と、いい終えたとき、どうやらゆとりのある眼で、女を見返すことができていた。

女中は、如才なく二人の間をとりもつと、それでも心残りな表情で部屋を出ていつた。話がききたかつたのだろう。話のききたいのは、郁之助もそうだし、相手の女はなおさらの筈だつた。

部屋に二人きりになつてから郁之助は（どこかで見たことのあるようなひとだ）という気がぼんや

りした。はつきりはわからない。わずかのひまに、きつちりと身だしなみをととのえてきたのは、さすがに武家の妻の素速さだろう。それにくらべると、郁之助の方はどうも恰好がつかない。しかし相手の女は、人妻のせいだろうか、しつとりとした潤いがあり、黙つていても郁之助の心をほぐしてくれる何かがある。或いは郁之助のどこか飄々(ひようひよう)とした様子が相手の心をほぐしてしまつたのかもしれない。

彼は、ごく何でもないことを、二言三言志乃にいつてから、改めて口を切つた。

「実は私は道中で或る拾い物をしました。あなたは落とし物をされたのでしよう？　別に疑う訳ではありませんが、私のいうことに答えていただきたいのです」

郁之助の口調は、話しながらに明るくなり、ようやく立ち直つてきたようにみえた。志乃はつつましくうなずいた。

3

「では、はじめに。あなたの落とされたものは何ですか？」

「鏡でございます」

「どんな鏡ですか」



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com